

ライフサポートねりま

症例概要 利用者: 90代 性別: 女性 介護度: 要介護5

病名: 右肩打撲後関節拘縮 うつ病

利用サービス: 入所

経過: 2019年に自宅で転倒、大腿骨頸部骨折を受傷、他院で手術加療後、リハビリ・在宅復帰目的で当施設に入所。約9か月入所後、在宅復帰、その後も当施設の通所、訪問リハビリを利用継続していたが、昨年12月自宅で転倒後、右肩関節痛著明にてADL全介助、離床困難となる。更に、幻覚・精神状態不安定を呈し、在宅生活が困難な状況となり、かかりつけ医・担当CMより入所相談があり再入所の運びとなった。

内 容

本事例は2019年に当施設に9か月入所され、在宅復帰した経緯があり、途中コロナ禍でご利用の中断と再開を繰り返しながらも、関係性が途切れることなく信頼いただき、ご本人の身体・精神および生活状況の変化に応じて、通所から訪問リハビリと継続的にご利用いただいた方です。

今回の入所に際しては、昨年末の転倒後、離床困難となった早期より再入所を勧めてきたが、精神的な落ち込みが強く、活動意欲の減退を顕著に認め、「あとは死ぬだけだから、このままでいい。」と入所に対し拒否が強く、半年間、寝たきり生活が続きました。

認知面は非常にクリアで品格を保たれた方でしたが、次第に精神的にも不安定な状態となり、「夜になると連れ去られて、朝にまたここに戻されるんです。」と幻覚と現実との区別がつかなくなり、恐怖を訴えるようになりました。更に物盗られ妄想も出現し、在宅ケア・ヘルパースタッフとの関係も破綻し、在宅生活が困難な状況になりました。

元々、生涯孤独、独身で生活され、音楽大学の教授を退いた後は完全に社会生活から離れ、親戚との関係も疎遠な状況にあり、かかりつけ医とケアマネージャーと連携し、ご本人にも「まずはご自身の安全を最優先に考えてください。どうか命を守らせてください。」と説得し、当施設に再入所の運びとなりました。

入所当初から、リハビリ介入だけでなく食事や排泄の生活全般に拒否があり、「早く死にたい、まるで生きる希望がありません」とベッド上で過ごし、リハビリ実施も困難でしたが、リハビリ以外の時間も頻回に声掛けをしたり、ご本人出身地の話や、好きなお花の話をすすめることで、気分転換と関係性の構築を図っていきました。

そして6月中旬頃になると当施設のガーデンにはアジサイやラベンダーなどの花が咲き始めました。前回の入所の際にも、好きなお花の話やラベンダーと一緒に摘んで押し花やポップリを作って、お部屋に飾った思い出があり、リハビリでは車いすに乗って花を觀賞することから始めると、花を見ることで自然と会話も弾み、笑顔も見られるようになりました。これをきっかけにして、次第に離床時間が増え、食事も食堂に移動して召し上がる事が可能となり、「今日のご飯がいつもより美味しく感じました」と前向きな発言も聞かれるようになりました。

その後は排泄も食事も離床が定着し、苦手であった他のご利用者との交流も楽しめるようになり、集団体操にも参加できるようになりました。日中の離床時間が増えたことで身体機能面に加え、表情も明るく変化し、リハビリでも積極的に歩行に挑戦することも可能となりました。車椅子の自走も僅かですが可能となり、日中の活動性は飛躍的に改善しました。

しかし、8月になり大腸がス貯留による腹満から食欲低下となり、次第に全身状態も悪化し、酸素投与も開始され、当施設でのお看取りの対応となりました。ご本人の意思を尊重する方針でより安楽に過ごせるよう、リハビリや食事など離床の方法もチームで共有しました。

その中で、最後は他院でご逝去されましたが、ご本人から「最後までここに居させてください。最後はここで皆さんと一緒に、安心して過ごしたいんです。」とのお言葉を頂戴しました。

今回と前回、二度にわたり、ご本人が生きる希望を失いかけた時にご入所いただき、ご本人と私たちの双方がお互いを尊重しあい、心を通わせた時間が安心を産み、信頼関係を育み、再び笑顔で輝ける時間を共有できたと思います。真摯に丁寧な、親身な対応を継続することの大切さとその力を改めて実感させていただく事例となりました。